

旧赤星鉄馬邸の当初仕様およびレーモンドの設計思想について

1. 旧赤星鉄馬邸および庭の設計思想について

■「アントニン・レーモンド自伝」にみられる旧赤星鉄馬邸の設計思想

「この三つ（注：赤星鉄馬邸、川崎守之助邸、福井菊三郎邸）の場合、デザインの問題点はいずれも本人の二重生活に必要な、入念な配置計画を作り上げることであった。客と、家族と、使用人のための分かれた玄関。その家に親しくない人を入れるための、異なった種類の応接間。管理人ためには場所や、その事務室など。和洋両設備の厨房。伝統的日本間と同様に、畳のある様式の部屋など。」

「どの住宅も鉄筋コンクリート造で打放し、耐震耐火。空気調和設備は当時はなかった。湿っぽい雨季や、熱帯性の暑い夏の、壁の結露を除くため、全建物は壁を二重にした。どの部屋も南を解放し、最大の窓口をとり、換気をはかった。南と西の窓口には庇をつけて、夏の太陽から守ったが、低い冬の太陽をとりいれるように計算した。二重生活の組み合わせは造園にも及んだ。造園には西洋式の部分と、純粋な日本式の部分とがあった。」

「三つの住宅のためにノエミと私は、庭園も家具も、じゅうたんも、テキスタイルも、電気器具もデザインした。簡単にいえば、仕事に付随するもの全部であった。だから三つとも今までどこでも成功したことのない、ごく稀な等質性と、統一性が与えられたのである。」

建築家として働く場合、我々が位置の計画をする時に先ず土地の研究をやる。そして日本住宅は庭と不可分のものであるがゆえに、家と庭とは同時に計画を進める。川崎家の平面に於ては我々は此の自然との接触を十二分に考究し、大きな居間は太陽の輝く庭と中庭の間に挟まれている。

- 施主の西洋式・日本式双方の様式を取り入れた生活（二重生活）に合わせた設計
- 鉄筋コンクリート造打ち放しの実践
- 外部空間（庭）と家との関係を重視した設計
- 建物だけでなく住居に関するものすべてのデザイン

■「アントニン・レーモンド作品集 1920-1935」掲載「日本建築に就いて」にみられる日本文化・日本建築に対するレーモンドの考え方

西欧の建築家があれ程苦闘する「形」「機能」「材料」の問題も日本建築にあってはいともたやすく解決され、形は全的にその目的に応ずる。日本建築は「自然」の進化に似る。凡ゆる観点に於てそれは内面的欲求に因縁をもち、その内面的要求に対しては全人生の真の価値の深き理解に基いた表現的な同時に実用的な正確適確な解決を見出している。

日本人のそれに比ぶれば我々の自然愛は余りに浅薄である。「自然」に対する帰依は日本伝統の美德であり彼等は常に自然より誤りなき「啓示」をうけて来たのである。

反対に日本家に入る人の心を先ずうつものはその無装飾であり、同時に「必然」の昇華せる装飾の効果である

（略）

幾何学的な線と自然の相との交錯のみが深く日本人の胸をうつのだ。

日本文化程「単純化」と「淘汰」につきつめられた切実な美を有つ文化が地球の何処に存在しているだろうか？

- 自然と不可分の暮らしや考え方
- 「単純化」と「淘汰」による美を持つ文化

■「アントニン・レーモンド自伝」にみられる日本文化・日本建築に対するレーモンドの考え方

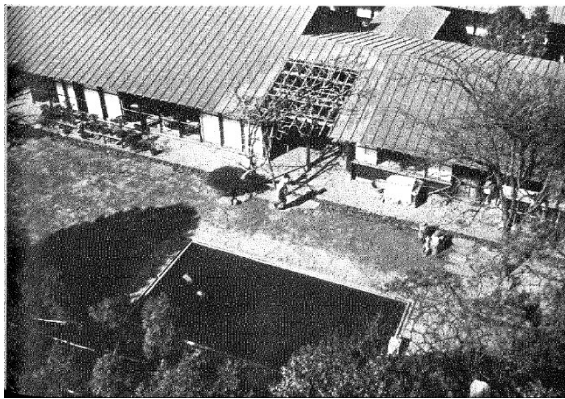
庭と家とは一体であり、庭は家の中に入り込み、家は草の中の蛇のように庭にくねる。西欧風に四角な家を大地の上に立てることは日本では不可能である。

いたるところが出入口となり、西欧風に唯一つの出入口から出入りすることなど、とてもできない。日本人は二階から遠い地平線を眺めるだけでは満足はできぬ。たとえハンカチーフほどの大きさであろうと、石のすえられた、苔むす大地を持たなければ止まず、葉から雨のしたたるのを見るために幾ばくかの木を植える。(略)

われわれが一つの仕事を始めるとき、最初にその土地の研究を進める。完全に統一体であるべき家と庭を、まず合体させることにしたのである。

■「アントニン・レーモンド自伝」にみられる麻布の自邸兼事務所におけるレーモンド自身の庭づくり

一つだけ効果なのはその庭園で、日ごとの手入れの結果、すばらしく美しい。庭の小さなプールは私たちや所員の一つの楽しみとなっている。



■「建築」1961年10月号にみられる日本文化・日本建築に対するレーモンドの考え方と設計思想

私は日本の建築が現に目の前にあることを感謝するとともに、日本の建築のなかには、何か絶対的な理念といったようなものがあることを悟りました。

(略)

この理念を簡素なことばで表現するとすれば、こんな風になると思います。すなわち、「最も簡潔にして直截、機能的にして経済的、かつ自然なるもののみが真に完き美を有する」と。これを実現する手がかりは、まず、内から外へ向かう設計態度を確立することであって、外から内へ向かったのでは、決してこういう美しさは生まれてこないのです。

○「戦後にあつてレーモンドは、建築の原理を新たに求め『単純、直截、正直、自然、経済性』の5つとした。所員はそれらを実践するための原則として受け入れ、モダニズム建築の範囲の拡大が始まっていた。」A・レーモンドのモダニズム：その設計作法 三沢浩

上記のようにレーモンドの5原則は一般的に知られているが、レーモンドによる著書やインタビュー等では見つからなかった。

■「新建築 39」（1964 年 9 月号）「南山大学」にみられるレーモンドの造園に関する考え方

大変美しい景色と植物は出来るだけそのまま保存しなければなりません。もし仮に現状を破壊して全部やりかえるとしたら、勿論相当の年月を要しますし、また例えそうしたとしても絶対に過ちを犯す事のない「自然」という巨匠の手になる作品に倣うものではありません。

○自伝等、他の著述でも、造園に特化した記述は多くないが、自然への敬意が示されている。敷地と建物の関係を重視し、敷地の条件把握・計画は建物の設計と不可分であるにとらえていたことが分かる。

■参考：「アントニン・レーモンド自伝」にみられるゴルフ倶楽部の例

すべてが機能的な建築のデザインを構成し、それが造園にも延長された。ゲームとともに何時も使われる建物の一部は、近接ホールから直通の道を通り抜けて、たやすく入れるように構成された。この通り道は芝生に大きなデザインを造り、道には常緑の芝と、異なった色の芝を用いた。高目に選定された櫟（クヌギ）の生垣が、駐車場とサービス・エリアを隠した。ゴルフ・コースはイギリスのコース設計家のアリソンのデザインにより完全であった。

○ゴルフコースの設計は専門家に任せているが、クラブハウスは周辺との調和や出入りのしやすさに配慮し、庭にしく芝にもこだわりをもっていたことがわかる。（旧赤星邸では、赤星家居住時代には芝とバンカーがあり、鉄馬夫妻がゴルフをしていたことから、参考として抜粋）

2. 竣工時の仕上げについて

- 設計図には仕上げ表がないが、図面に記入があるものや現況などを照合して推定する。
 - ・建築雑誌や書籍等に掲載された、竣工時や直後の古写真や仕様
 - ・当初仕上げの上に塗装や布張り、ボード張りなどがされた箇所を手剥がし・洗浄によって確認する。
- 設計図、写真、記述の比較や工事記録から、各時代の改変を明らかにし、より詳しい年代は、修道女会へのヒアリングによって明らかにしていく。

【設計の考え方・当初仕上げの主な参考資料】

- ・設計図面（レーモンド事務所提供）
- ・「アントニン・レーモンド建築詳細図譜 復刻版」鹿島出版会, 2014
- ・K. NAKAMURA 編「アントニン・レイモンド作品集 1920-1935」（城南書院, 昭和 10 年
- ・「Architectural Record vol. 79」McGraw Hill Publications Company, 1936. 1
- ・「新建築 1935 年 7 月 -- 復刻版. -- 1 巻 1 号（[大 14. 8]）-20 巻 10 号（[昭 19. 12]）」不二出版, 2007
- ・「SD 第 286 号・7 月号【特集】昭和初期モダニズム」鹿島出版会, 昭和 63 年
- ・アントニン・レーモンド（三沢浩訳）「自伝アントニン・レーモンド 新装版」鹿島出版会, 2007